

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月8日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720089

研究課題名（和文） 室町期漢籍注釈における五山僧・公家学者間のネットワークと学問環境の実態解明

研究課題名（英文） A study on an academic scholarship of Zen monks and the nobilities during the Muromachi Period ; with a focus on annotated editions of classical Chinese books.

研究代表者

藤巻 尚子（FUJIMAKI NAOKO）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：50551016

研究成果の概要（和文）：

室町期の学者たちがいかに学問に取り組んでいたのか、また、その学者たち同士でどのような交流があったのかを、注釈書・抄物の読解、ならびに同時期の日記・記録類との照合から明らかにした。あわせて、室町期の研究成果が江戸期の学者たちに与えた影響についても検討した。さらには、『太平記』、『三国志演義』、アーサー王伝説の比較を通して、学問を発展させた場として神社や寺院が存在していたことを指摘し、学問が行われた“場”の実態について考察した。

研究成果の概要（英文）：

The primary objective of this study is to investigate how scholars -- Zen monks and the nobilities -- of the Muromachi period had been working on their study, and how they had been in contact with each other, by examining the annotated books and the diaries which were written in those days. The secondary objective of it is to examine the influences of the study of the Muromachi period on that of the Edo period. And thirdly objective of it is to compare "Taiheiki" with "The Romance of the three Kingdoms" and the legends of King Arthur with a point of religions--temples, shrines and cathedrals --.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：五山僧 公家学者 注釈 桃源瑞仙 月舟寿桂 太平記 三国志 医学

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究課題に取り組むまで

に、平安時代から近世前期にかけて三国志言説がいかに日本で享受されてきたか、その深化の過程を通史的に把握するべく研究を行

ってきた。その方法は、諸文献内に点在する三国志関連叙述をピックアップし、その内容を整理・検討することで、各時代に見られる特徴を、その文化・社会的背景とともに明らかにしていくというものであった。結果、単に三国志享受の問題にとどまることなく、日本の文学史・文化史の構築にも繋がったと考えている。

これらの作業の中から注目すべき特徴として浮かび上がってきたのが、室町期の五山僧や公家学者たちの学問が三国志享受の深化に大きく貢献しているという点であった。すなわち、彼らが儒学や史書を学ぶ上での副産物として、三国志に対する理解も深まったのである。

三国志享受史を構築する側からすれば、室町期の学者たちの関与は、享受史の中のほんの一齣に過ぎないものではあるが、室町期の学者たちの側に軸を据えて考えるならば、彼らの学問の対象とした領域が、三国志にまで及んでいる、つまり、彼らの学問が多岐に及んでいる、ということになるのではないだろうか。事実、彼らが積極的に大量の注釈書や抄物を作成し、また頻繁に講義を行ったために、様々な領域に関わる学問が発展したのである。

注釈書・抄物を作成するという行為は、その学問内容を他者と共有することを可能にする。そして、学問を個人的なものから組織的なものへと変化させ、結果、学問の発展を急速に押し進めていくこととなる。だとすれば、その注釈書・抄物の叙述や講義の内容を整理・検討していくことによって、当時、いかにして学者たちが学問を探求していたのか、その背後にどのような学者間のネットワークがあったのかが浮かび上がってくるのではないだろうか。

彼らの学問の実態を明らかにすることは、室町期という時代を考える上で、重要な柱となるだろう。本研究課題は、そういった問題意識のもとに成り立っているのである。

## 2. 研究の目的

異国のテキストや自国の古典化したテキストの読解に際し、原典だけでは理解することが困難で、何らかの手助けが必要だと判断された時、抄物・注釈書が編まれることとなる。しかし、何をどう解説するかという点においては、各注釈者の指向に基づいて数多くのヴァリエーションが生まれることとなる。もっとも、その一方で、異なったテキストに対する注解の中で、全く同じ文言が使い回される事例も往々にして確認される。よって、注釈について考察する際には、そのテキスト単体の問題として考えるのではなく、もっと

大きな枠組を意識して把握していく必要がある。

そこで本研究では、注釈書・抄物の整理・検討から、学者間で学説がどのように伝播していくのか、その様相を明らかにしていく。これを遂行する上で最も重要となる作業は、注釈書類の収集・分析である。①典拠として利用されるテキスト、②注釈書内で言及される他の学者たちの名、③複数の注釈書で共有される注解、学説、といったポイントから各抄物・注釈書の性格を浮き彫りにしていきたい。

尚、その作業にあわせて、同時代の日記や文書といった周縁資料にも目を向けていくつもりである。これら周縁資料から、注釈作成者がどのような文献を利用することができる環境にあったのか、どういった人物と交流があったのか、また、学問を究める上でどういうポイントに注目していたのか、といった点が浮かび上がってくるはずである。

この2つの方法から、言説が伝播する過程を明らかにし、学者達のネットワークの構築することとしたい。

## 3. 研究の方法

本研究課題に取り組むにあたって、3つのポイントを設定した。以下そのポイントごとに、その研究方法を説明していく。

### (1) 室町期の抄物・注釈書の整理・検討

本研究課題に取り組む前から、漢籍関連の抄物・注釈書についての考察は行っていたため、その研究成果に積み重ねる形で研究を進めることとした。室町期の学者たちの学問環境の実態を考える上では、今までのように文学的領域だけを考察対象としているわけにはいきまい。そこで、扱うジャンルやテキストの数を増やし、より総合的な検討が行えるよう努める。

また、この研究の遂行にあたっては、抄物や注釈書だけを考察対象としているだけでは不十分である。その注解を成立させた背景を探るべく、学者たちの行動が細かに記録されている同時期の日記・記録類の検討も重要となるのである。

よって、抄物・注釈書自体の読解と、その内容を補強するための材料としての日記・記録類の検討という2つのアプローチから、考察を進めることとしたい。この考察こそが、本研究課題の核として位置付けられるのである。

### (2) 室町期から江戸期への学問継承

学問というものは、特定の期間のみに行われ、次の時代を迎えると同時に消滅するよう

なものではない。室町期の学問は、江戸期の学者たちにも受け継がれたはずである。言ってみれば、江戸期の学問は、室町期の学問の“出口”である。だとすれば、江戸期の学問事情を把握することによって、室町期の学問の実態を逆照射することも可能なのではないだろうか。つまり、直接的に室町期の学問を扱わずとも、江戸期の学問について考察することで、室町という時代をも考察したことになるのである。

この研究の始発点として、まずはこれまで研究対象としてきた三国志を取り上げることとする。室町期の学者たちの学問が、三国志享受に多大なる影響を与えていたことは、これまでに考察してきたとおりだが、彼らの三国志に対する理解は、江戸期の学者にどのように受け継がれたのか、もしくは切り捨てられたのか、その点について検討する。具体的には、江戸期に成立した『太平記』の注釈書である『太平記鈔』、『太平記賢愚鈔』内の三国志に関する注解を取り上げ、そこでの解説に、どのような形で室町期の研究成果が生かされているのかを明らかにしていくこととする。

### (3) 学問の背景に存在する聖地の問題

室町期において、学問を成長・発展させるためには、五山という“場”が重要であった。公家学者による学問も、この五山や五山僧に負うところが大きかったのである。また、数多くの寺院や神社で縁起が作成されたのも、そこに学問が存在したことを窺わせる。つまり、五山をはじめとする寺社、すなわち、“聖地”という“場”の問題について考えることも、室町期の学問の実態を考える上で、欠かすことが出来ないのである。

よって、聖地の縁起と物語・伝承との相互的影響関係についての考察を行う。具体的には、『太平記』と新田大明神、新田神社の事例を取り上げる。その際、比較対象として、関羽の亡くなった地として知られる玉泉寺と三国志との関係、イギリスのアーサー王伝説とグラストンベリー修道院との関係についても言及することとする。

尚、この研究成果は、(2)とも関わることとなる。すなわち、(3)は『太平記』と三国志との関連性を明らかにすることでもあるため、その結果を(2)の結果と重ね合わせることで、研究代表者のライフワークである、日本での三国志享受の通史的把握の一齣として位置付けられることとなるのである。

## 4. 研究成果

「3. 研究の方法」に記した(1)～(3)に対応させて、それぞれの成果をまとめることと

する。

### (1) 室町期の抄物・注釈書の整理・検討

この研究課題を進める上で、最初に扱ったのは『史記抄』である。桃源瑞仙が手がけた同注釈書には、随所に例示として日本関連叙述を持ち出すことで、その内容理解を助けようとする配慮が見られる。この点自体については、すでに指摘してきたことではあるが、今回の考察で、この指摘が、医学に関連する伝である「扁鵲倉公伝」を読む際に、重要になることが明らかとなった。

というのも、桃源は、医学関連の注を施す際にも、日本の医者 of 医療活動を例に挙げるなどしてわかりやすさを求めるのだが、同じく『史記』の注釈書を作成した月舟寿桂は、そういった桃源の注解を参考にしつつも、日本初紹介となる中国の医学書を大量に引用し、医学自体に対する関心に基づいて注解を施すことを重視するのである。これは、後出の作品がオリジナリティを求めたが故に、先行の注釈書とは異なる注解の方法を生み出した結果であったと考えられる。

このように、2 テキストの比較検討を通して、学説が継承される様、また先行テキストから脱却して異なった注釈を作成していくその過程が明らかになったわけだが、詳細については、雑誌論文(1)にまとめたとおりである。

その成果を踏まえ、続いて行ったのは、月舟がなぜそこまで医学に関する知識を得ることができたのかについての考察である。彼の著述作品や彼と同時代の日記・記録類の検討から、彼と同時代の医師たちとの交流の様を考えていった。結果、他の学者に比して、月舟と医師たちとの交流が密であり、彼の著述活動こそが、周囲の学者たちにも医学に関心を持たせる契機となっていた可能性が高いことが判明した。尚、この問題については、現在某誌に投稿中である。

現在の学問ジャンルからすれば、医学と文学とはかけ離れた領域として位置付けられ、両者との相関性を見出すことなどは難しいことだろう。しかし、それと同じ感覚で室町期の学問事情を捉えていいはずはあるまい。室町期の学問の有様を解明するためには、より幅広い視野をもって考察する必要がある。そういった今後の課題も見えてくる結果となった。

### (2) 室町期から江戸期への学問継承

室町期の学問の“出口”として、江戸期における学問状況を検討するべく、『太平記賢愚鈔』、『太平記鈔』内に見られる三国志関連の叙述をピックアップし、その叙述内容と、室町期の学者たちによる三国志関連叙述との比較検討を行った。

そもそも注釈書が作られていること自体、室町期の学問の継承と言うことができるだろう。『伊勢物語』や『源氏物語』など平安期のテキストが、鎌倉や室町と時代がくだっていく中で、解説が必要となり、注釈書が作成されていくのと同じ展開で、『太平記』が過去のテキストとなりつつある江戸期に注釈書が作成されていったのである。

叙述内容に関して言うならば、三国時代と南北朝時代を重ね合わせて正統論問題を語る点などは、室町期以上に考察が深められていると評価できるのだが、漢詩に関連する注解部分などでは、室町期に展開されていた学説をそのまま継承している点を確認できるのである。

あわせて、この『太平記賢愚鈔』と『太平記鈔』といった注釈書の存在が、江戸期における『太平記』ブームの担い手として、重要な役割を果たしていることも明らかとなった。注釈書は、室町期と変わらず、様々なテキストの読みを深め、さらには享受者層を広める上で、欠かすことのできない存在だったと言えよう。

このように、室町期の学問は、様々な形で、江戸期の学問に継承されていたと見なすことができるのである。この研究成果については、雑誌論文(2)にまとめた。

### (3) 学問の背景に存在する聖地の問題

学問の場の1つとして、寺院・神社といった“聖地”の存在が挙げられる。そこでの学問は、自身の地位を向上させるために使われることが多い。

たとえば『太平記』は、敗死した新田義興が怨霊化し、その魂を鎮めるために神社が作られたというエピソードを載せるのだが、その神社に該当するとおぼしき新田神社は、『太平記』の話を下敷きにして自身の縁起を作成し、その名を世に知らしめるのである。さらには、こうして格が上がった神社の名前を、後世の『太平記』伝本が明記するようになるといった具合に、寺社と物語は長期的なスパンで相互に影響を与え合っている関係であったことが指摘できる。

尚、この現象は、関羽が怨霊化し、その鎮魂の場として、玉泉寺が認知されるようになり、そこで作られた縁起が、『三国志演義』に再度取り込まれるようになる動きと共通する。さらには、アーサー王の死が、時代の経過とともに、当時大きな権力を持ちつつあったイギリスのグラストンベリー修道院と関連づけて語られるようになるのとも似た関係と言える。

つまり、世界各国で、聖地が学問や物語・伝承の生成、発展に大きな影響を与えていることがいえるのである。この研究成果は、図

書(1)にまとめた。

尚、この研究成果は、研究代表者がこれまで行ってきた、戦争文学の比較文学的研究の一環として位置付けることができる。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

(1) 田中(藤巻)尚子 「『史記抄』「扁鵲倉公伝」にみる桃源瑞仙の志向性—室町期の学者たちと医学・医書—」 古典遺産 61号、査読無し、2012年3月、21ページ~31ページ。

(2) 藤巻尚子 「『太平記鈔』における三国志の享受—『太平記賢愚鈔』との比較を始点として—」 三国志研究 5号、査読有り、2010年9月、121ページ~129ページ。

[学会発表] (計2件)

(1) 藤巻尚子 「中近世日本における三国志享受—『太平記』との関わりから—」 International Conference on "The Romance of the Three Kingdoms": Its Historical Transmission and Enjoyment in East Asian Context 2010年11月30日 於韓国中央研究院

(2) 藤巻尚子 「結びつけられる三国志と太平記—近世初期の学問・思想の一齣として—」 三国志学会 第5回大会 2010年9月11日 於二松学舎大学

[図書] (計1件)

(1) 佐伯真一編 『中世の軍記と歴史叙述』 竹林舎 2011年4月 総頁数638ページ。執筆者全26名。  
藤巻尚子 「『三国志演義』と『太平記』における怨霊と聖地—関羽・新田義興の比較、付・アーサー王伝説との類似性—」 53ページ~72ページ。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
藤巻 尚子 (FUJIMAKI NAOKO)  
早稲田大学・文学学術院・助教  
研究者番号：50551016

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし